

## “オオルリ”の鳴く里で、ボランティア活動ー中土佐町大野見ー

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は、中土佐町大野見から“おおるり会”代表、下元和恵さんについてお伝えします。



「幸せはすぐそばにあっても、なかなか気づかないものだ」チルチルとミチルが幸せの青い鳥を探しに行くというメーテルリンクのこの童話は、幼い頃に誰しも一度は読んだことがあるだろう。“青い鳥”という言葉には、空想をかき立てる魅力的な何かがあるようだ。

そのモデルではないようだが、日本で見られる青い鳥の代表格“オオルリ”を皆様はご存じだろうか。物の本によればオオルリは、冬季は東南アジアで越冬し、日本には夏鳥として渡来・繁殖するらしく、北海道から九州までの山地や丘陵に生息し、特に溪流沿いの良く茂った森林に多く見られるという。

まさに“清流の森に棲む鳥”ということなのだ。なるほど、夏場、四万十川流域の至る所で、この美しい鳥を見かける人も多いと聞く。

この“清流の森に棲む”オオルリを、かつて“村鳥”としていたのは、四万十川源流点にほど近い、旧大野見村（現中土佐町大野見）だ。

← オオルリ 写真提供：農家民宿“野彩”川田早苗さん（橋原町松原）

### 地域のボランティアグループ “おおるり会”

人口1465人（12/末現在）、少子高齢・過疎化など典型的な中山間地の課題を抱える中土佐町大野見地区に、女性メンバーだけで構成される福祉ボランティアグループ“おおるり会”が誕生したのは21年前1990年2月ことだ。設立のきっかけは、ボランティア養成講座を受講した何人かが発した、「自分たちも何かやりたいね」という小さな声だった。それから21年、おおるり会は地域に根ざした地道な活動を続けてきた。

現在メンバーは24人、年齢も83～38歳と幅広い。その“おおるり会”会長を12年連続で務める下元和恵さんは、この会はこれをしなければならぬという拘束はない、と語る。「無理をしないで楽しみながらが原則です。だから“それぞれのできるボランティア活動”への自由参加です。83歳の最高齢の方は『私が参加していること自体が私のボランティア活動』と言っているくらいですから」メンバーはお互い“和恵さん”とかの名前で呼び合う。「全員気心が知れているし、みんなとっても協力的。呼びかければすぐに集まってくれる。“出られるときに出る”のが基本ですが、いつでも必ず10名ぐらいは集まります。」

発足当初の活動は、独居高齢者宅などへの給食サービス、お祭り時の模擬店や協力など、主に高齢者福祉に関する活動が多かったという。また、女性ならではの視点で感じたことを行政に提案し、その結果、様々なことでの改善もなされてきた。そして近年は、地域のこども達に関わる活動にも積極的に参加するようになってきている。例えば、13年前から取り組んでいる“合宿通学”のボランティア。これは地域に1つしかない大野見小学校（児童数59人）の4・5年生が対象で、こども達だけの5泊6日の合宿・通学で、自主性・忍耐力・協調性を養おうという企画。この企画のサポート役も任されている。

### おおるり会の活動 と 地域の人づくり

会長の下元さんは、ボランティア活動以外でも多忙な日々を送る。十数年前に亡くしたご主人に代わりトラクターに乗って60aの田んぼを耕し、2年前に看取った義父の介護をしながら4人の子どもを育て上げた。だからこそ、この活動に対しての“想い”があるようだ。「最近、保育園でも子どもの送り迎えは祖父母になったりしている。両親は遅くまで共働きで、多くの親に余裕が無くなっていると感じるのです。世の中はどんどん変わっていく。だからこそ、地域で子どもを育てていくことが大切だという想いがあります。」

「私は何かするのが好きなの。じっとしてられない質なのよ。悪く言えば、集中力がいないのね。また欲張りなの。一つのことだけに集中すると、なんかもったいない気がするのよ。2つ以上のことを同時にしていないと気が済まないのね。私に用があって電話してくる人も、私がいつも何処にいるか分からないから、“今日はどこにおりますか？”って、必ず聞くの。」そんな下元さんに、気負いなどは全く感じられない。“やれることをやっているだけ”そういう淡々とした姿勢が伝わってくる。

「会長職は役得なんです。“会”がしたことのお礼はみんな私に言ってくれるから、ふいふいふ・・・」

『幸せはすぐそばにある。それに気がつかないだけ』どこまでもポジティブな下元さんの笑顔からは、青い鳥の羽が残したあのメッセージが、しっかりと私にも伝わってきた。



ご自宅近くを流れる四万十川と、長野沈下橋

